

## 益田鈍翁旧蔵、徳治二年銘法華寺羅漢盤の研究と修復報告

小池 富雄  
渡邊 裕香

### 一、緒言

本稿で取り上げる羅漢盤とは、裏面の朱漆文字の銘文により奈良法華寺で羅漢供養に用いられたといわれる長方形の盆の三十枚余のうちの一枚である。裏面の朱漆銘文には、かすれて判読しがたい部分があるが目視により概ね「法華寺羅漢盤 三十二□□□□ 徳治□□□□月日」と判読できる。文字の詳細な判読と検討は、後述する。徳治二年（二三〇七）とは鎌倉時代後期において法華寺が隆盛していた時期にあたり、わが国の漆塗りの飲食器としては、漆工史、仏教工芸史さらに近代の茶道史のうえでも貴重な伝世品となる。

盤とは鉢・皿などと同じく、ものを盛る器であり、盤案、盤器、盤子など食器・食膳の用例があり、また転じて大きく安定した比喻表現の「盤石」の語もある<sup>①</sup>。盆、折敷、食膳などと同類であり、特殊な呼称ながら朱漆銘に記された「羅漢盤」の呼称で本稿は紹介したい。



図1 全景（表面）



図2 全景（裏面）

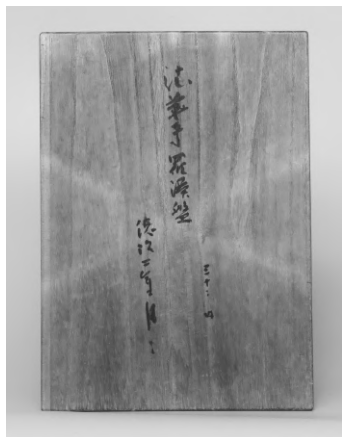


図3 外箱（蓋表）



図4 蓋裏朱印蔵札「碧雲臺」

全体の姿(図1)は長方形の盤面の周囲に低い縁を巡らし、裏面には低い棧脚をつける(図2)。法量は縦四十二・三、横二十九・五、高さ二・五センチメートル。木胎黒漆塗りで一部にかすかに朱漆で塗った痕跡がある。本稿で紹介する作は、他家所蔵の羅漢盤と比較すると最も損耗、破損が甚だしい。三井物産の創業者の一人で近代の実業家であり、また近代の茶人でもある益田孝、号鈍翁(一八四八〜一九三八)が茶の湯の道具として収蔵した旧蔵品が本稿で紹介する羅漢盤である。千利休以来の大茶人といわれる鈍翁は、著名な茶の湯道具だけでなく旧来の枠にとらわれず仏具・仏画をはじめ幅広く自らの目に叶う品々を収集した<sup>(2)</sup>。本作は鈍翁の旧蔵を示す鈍翁の箱書き(図3)と「碧雲臺」

の朱印蔵札(図4)もあり、やつれて欠損した盤面左下個所や棧脚などを新補して修復を加えている。この修復は、おそらく鈍翁の好みによるのであろうが、半世紀以上を経た近年になってさらに進行し脆弱化した部分があるので、この度の分析と修復施工に及んだ次第である。不鮮明な文字の判読、品質形状、放射性炭素(<sup>14</sup>C)による年代測定などを考察し、あわせて修復施工を本稿で報告する。

奈良法華寺とは、創建は天平時代とされ、当初は大和国の国分尼寺として経営されてきた。現在地は創建以来の位置から移動は無いとみられ、近年の調査により往時の広大な境内地がうかがえる。現在は本堂、門(重文)、本堂には維摩居士像(奈良時代、国宝)があり、絵画の文化財としては、絹本着色阿弥陀三尊及童子像(三幅対、平安時代、国

宝)などが知られている。平安時代には衰退したらしく、院政期以後の争乱ではさらに衰微した。鎌倉時代になって重源による南都の復興に加えて、その後の叡尊、忍性らの奈良律宗の中興を経て、寺勢は回復して江戸時代以後、今日に至っている<sup>(3)</sup>。

法華寺所蔵の『法華滅罪寺年中行事』<sup>(4)</sup>によると、十四世紀には叡尊忌はじめとして年間を通じて様々な行事が盛んに行われたのが知られ、羅漢供養は正月三ヶ日の行事と正月二十八日の行事として記録されている。

一連の法華寺羅漢盤のうち、現在において他家の所蔵となった作を含めて、総数は現段階で何枚が現存しているのか、全貌は明らかではない。河田貞著『根来』<sup>(5)</sup>には四枚の個人蔵の羅漢盤が収録掲載されており、そのうち二枚は朱漆書きの銘があり、姿や寸法もほぼ本作と同様である。図版番号六十八の羅漢盤の裏面朱漆銘は「法華寺羅漢盤 三十三枚之内 徳治二」、法量縦三〇・〇、横四十二・五、高さ二・五センチメートル。図版番号六十九は「徳治三年三十六枚之内」、同じく法量は縦二九・八、横四十二・三、高さ一・五センチメートルである。裏の朱漆銘に違いがあるが、実際にはかすれて判読不明のために文字があるか否かも確認できないため違いがある可能性もある。徳治二年か三年と判読するのがふさわしいかも検討を要する。銘文の判読は、本作の赤外線撮影、画像処理結果を踏まえて後段で述べる。本作の箱書きでは益田鈍翁が「法華寺羅漢盤 三十二 内 徳治二年二月日」と実際の羅漢盤の裏面の字配りに合わせて、「法華寺羅漢盤」を中央の上部に、数と年月を下部の両脇に配して墨書している。鈍翁の判読が妥当だったかも後段で述べたい。図版番号六十八と同六十九はおおむね同様の法量と形姿であり、同六十八では、剥落して白木を見せる中央部から判断すると柾目材の一枚板だが同六十九は同じく一枚板ながら板目材である違いがある。同六十九は縁の周辺部にかすかに朱漆の痕跡が見える。

MIHOミュージアム編『朱漆「根来」 中世に咲いた華』<sup>(6)</sup>に掲載の図版番号〇五二の羅漢盤は、さらに盤面剥落が全面に及んでいる。裏面朱漆銘を「法華寺羅漢盤 三十三枚之内 徳治二」と判読するものの数量以下は、朱漆文

字のかすれのために判読が不十分であるとしている。羅漢盤と同じく法華寺旧蔵在銘の漆塗菜桶には「徳治二年」と記す作が文化庁（重文）、細見美術館（重美）、大阪市立美術館に所蔵されている。

河田貞氏は、前掲書において法華寺羅漢盤の解説および同時代の奈良の寺社での様々な漆塗り盆について左記の種類を挙げて述べている。

安居屋盆（あんごやぼん）とは、方形入角折敷の裏面左右に棧脚をつけた形式を俗称として安居屋盆と呼ぶ。奈良・春日大社の末社の安居屋の什器として伝来したとの伝承に由来する。しかし由緒を証明する在銘作は無く、「佛性寺御盤」と記す至徳元年（一三八四）銘の作例を最古と紹介する。次いで興福寺塔頭四恩院伝来の正長元年（一四二八）銘の安居屋盆（個人蔵）を挙げる。これは盤の上面は朱漆、縁と裏面は黒漆塗りであり、裏には朱漆で「正長元年戊申十月日 南都四恩院之内□静院常住物也 新造之大工藤原包満」の銘文がある。

手力盆（たじからぼん）とは、安居屋盆とおおむね同系統の形状で盤の上面は朱漆塗り、縁を含む裏、脚などは黒漆塗りである。春日大社の末社手力社にちなむものの名称の創始時期は未詳であり、一つの末社に限るのではなく春日大社の中で式年遷宮の度に造替され、民間に払い下げられて製作年代の様々な品が多数に流転している。いずれも裏面に黒漆地に蝶鳥文を螺鈿であらわしており、やはり春日大社に伝来する丸盆と共通する装飾であると指摘する。

またほかにも四脚付きの盤、供物台および方形ではないが円形の盤もある。もっとも代表的な円形盤である東大寺所蔵の修二会に使用する練行衆盤は上面が朱漆塗り、裏面は黒漆塗りで永仁六年（一二九八）の年紀銘文を記し、十一枚が重要文化財に指定されている。銘文は「二月堂練行衆盤廿六枚内 永仁六年十月日漆工蓮仏」と丸盆の鐫裏面に朱漆書きされており、他家では北村美術館、根津美術館はじめ個人蔵品となっている練行衆盤もある。

# 法華寺羅漢盤

三十六枚之内

徳治□年□月日

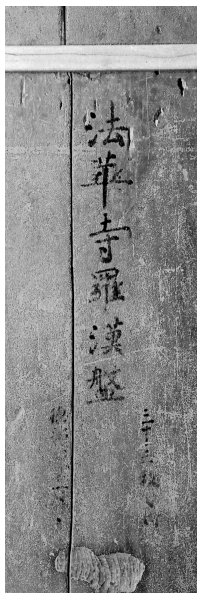


図5 補正画像(左)と釈文(右)

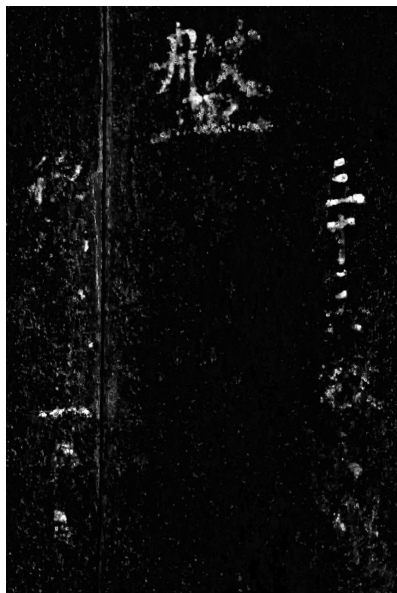


図6 銘文の下段部分(補正画像)

## 三、朱漆銘文の判読

本作裏面の朱漆銘文は、経年劣化による漆塗膜の摩滅で一部の文字が辛うじて判読できる状態である。銘文は羅漢盤の横方向に三行、中央上部に「法華寺羅漢盤」の文字を大きく記す。「法華寺羅漢盤」の文字を挟んで左右下部に一行ずつ数と年月を記す。右下部は冒頭部分に「三十」、左下部は冒頭の「徳」の文字が目視で判読できた。他の文字は赤外線撮影を実施して判読を試みたが、漆塗膜の摩滅が著しく、同手法では文字を判読できなかった。そこで写真撮影したデジタル画像を基に、かすれた銘部分の色を強調し、文字の判読を試みた。

修正された画像(図5、図6)から右下部は「三十」以下に四つの文字が確認できた。第三の文字は、一本の水平な線の上下に点が記され、上に一つ、下に二つの点があることから「六」と推定される。第五の文字は「之」、第六は「内」と読める。第四の文字は隣の下部が交差した木偏の文字とみられる。他家所蔵の羅漢盤には数が記され、本作も「三十六□之内」と読めば第四の文字は



「枚」と推定される。

年月部分は劣化が著しく、一部は完全に摩滅していた。判読可能な第二の文字は「治」、末尾の二文字は形状から「月日」と読み、「徳治□年□月日」と推定される。第五の文字は、長さの異なる水平の線が三本みられるが、上部は「年」が記されていると推定できる位置と重なるため「二」「三」のいずれか断定に至らなかった。益田鈍翁筆とされる箱書きは朱漆銘文の内容と一部異なり、「法華寺羅漢盤 三十二 内 徳治二年二月日」と記す。判読が異なる理由は経年劣化により朱漆銘文が摩耗した後に判読できる部分のみ記したのでだろう。箱書きを参考にするならば「徳治二年二月日」と読める。しかし、北村仁美氏の「松田権六「優品之調査」<sup>7)</sup>によれば、松田権六が調査した二点の「法華寺羅漢盤」は、「徳治二年一月日」と「徳治二年月日」と判読したと記録されている。また他家所蔵の作では徳治三年とする例もあり、正確な年月の判読には至らなかった。

#### 四、木地構造

木地は虫損により内部を著しく損傷していたため、ソフトX透過撮影による内部調査では木地の詳細な構造を観察できなかった。木地の欠損や漆塗膜の剝落個所を目視観察し、木地構造について考察した。本作の盤面は厚さ一・〇センチメートルの長方形の板を用い、四隅を丸く成形する角丸である。盤面の中央にはうっすらと木目が観察でき、板目材と推定される。木目と亀裂の状態から本作は一枚板、あるいは幅の異なる二枚の板を水平方向に接ぎ合わせたと推測される。松田権六の調査資料には檜の一枚板を使用したとする羅漢盤が一例あるが、本作は樹種と接ぎ合わせ枚数の断定には至らなかった。

盤面周囲の縁は四辺のうち短辺と長辺それぞれ一辺を欠失している。形状は断面が半円形の棒材で、木釘を用いて長方形の盤面に留める。木釘は短辺に二本、長辺に三本使用する。長辺の木釘は棧脚の端部と同じ位置に打ち込まれ、

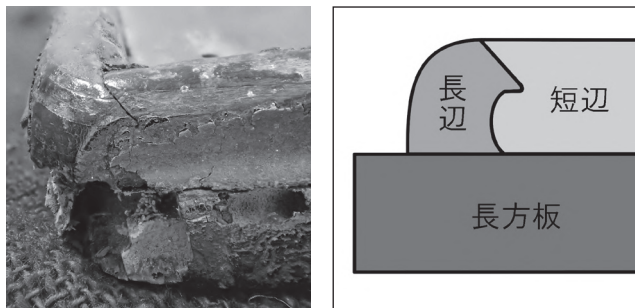


図7 緑の短辺と長辺の接合(左:写真、右:模式図)

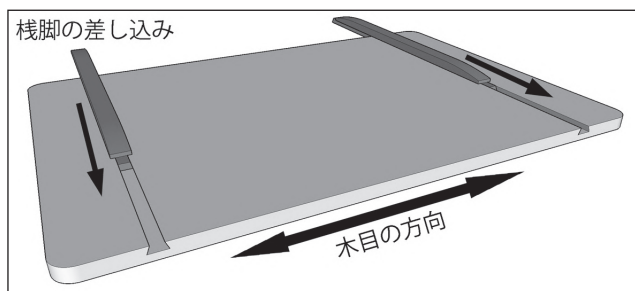


図8 長方板の裏面と緑の接合方法(3D模式図)

裏面にまで達する。棧脚の端部に貫通する木釘は円柱形である。短辺と長辺は、短辺小口を長辺端部の側面に図7のように接合する。欠損箇所も同様であったと推測される。緑の四隅は長方板と同様に角丸に整える。

裏面には幅一・五、長さ二十九・五、高さ最大〇・八センチメートルの棧脚を二本差し込む。両端部を斜めに削ぎ、全体は丸みを帯びる。棧脚の上面には最大幅一・二センチメートルの蟻形と呼ばれる扇状のホゾを設け、長方形の板裏に彫り込んだ深さ〇・六センチメートルの蟻形の溝に差し込む(図8)。長方形の盤面板の木目に対して直角に設けられており、膨張収縮による反りを防止する意味も含まれるだろう。糊や刻苧などの接着剤の痕跡は認められず、盤面から打ち込まれた木釘が端部に達し、固定していると推定される。

漆塗膜は経年の摩滅により詳細な構造を確認できなかつたが、総体黒漆塗りで盤面の四辺縁および縁外側に黒漆の上に塗布された朱漆を確認でき



表 1 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\sigma$ $^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-44588	-24.85 $\pm$ 0.16	839 $\pm$ 19	840 $\pm$ 20	1179-1191 cal AD (17.01%)	1168-1171 cal AD ( 1.33%) 1174-1262 cal AD (94.12%)
				1203-1228 cal AD (42.55%)	
				1246-1254 cal AD ( 8.71%)	

※1 $\sigma$  暦年代は68.27%、2 $\sigma$  暦年代は95.45 パーセントの信頼限界の暦年代範囲である。

( ) 内は範囲内に暦年代が入る確率を示す。

る。盤面の中央部分は朱漆を確認できないが、縁の内側部分にも朱漆が僅かに残る点から朱漆塗りであった可能性が示唆される。布着せは繊維がみられず、棧脚や縁の接合箇所にも痕跡を確認できなかった。

## 五、放射性炭素年代測定

放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) は炭素の中でも不安定な同位体であり、 $\beta$ 線を放出しながら安定した窒素へと放射壊変する。生物は光合成や食物連鎖から放射性炭素を体内へと摂取し、生命活動が停止すると取り込まれた放射性炭素が一定の速度で減少していく。この原理を応用し、試料中に含まれる放射性炭素の存在比率から年代を測定する方法を放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代測定法という。放射性炭素年代 ( $^{14}\text{C}$  年代) は、試料中に含まれる放射性炭素濃度の測定値を換算した値であり、西暦一九五〇年を基点として BP や yrBP で示される。さらに放射性炭素年代は暦年に校正され、cal AD または cal BC で表記される。

本作は所蔵者の許可を得て盤面の欠損箇所の小口内部から微量の木部試料を採取し、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を専門会社に委託した。分析報告書に基づき使用機器と結果を以下に抄出する。試料は前処理を経てコンパクト AMS (NEC 製、1・5SDH) で測定された。数値の算出にはリバーの半減期五五六八年を使用した。

年代測定の結果を表 1 に示す。1 $\sigma$  暦年代および 2 $\sigma$  暦年代範囲をみると十二世紀後半(平安時代後期) から十三世紀中葉(鎌倉時代) を示した。木材の放射性炭素年代測定では、樹木の中心部分(年輪の中心部分)であるほど古い年代が得られる。そのため測定箇所により、放射性炭素

年代と伐採された年代および実際に木材として使用された年代に差を生じる場合がある。この誤差を古木効果と呼ぶ。本作の場合、伐採された年数は測定結果よりも新しいと考えられ、古木効果を考慮すると朱漆銘文に記された十四世紀初頭の徳治年間にかかる可能性がある。

## 六、損傷状況

全体に経年による漆塗膜の剝落、虫損がみられ、一部に木地の欠損と断裂を生じる。漆塗膜の摩耗は盤面に著しく一部で木地を露出している。盤面中央部の朱漆は摩滅し、四辺縁の周縁に僅かに残る。盤面の長方形板は長辺の一边（図1、上辺）で木地を欠損し、短辺の一部（図1、下辺左）も木地を欠失して白木の補材で形状修復されていた。木地の膨張による歪みはないものの、木目に沿った断裂を二箇所が生じる。裏面の下部には大きくえぐれた傷が一箇所ある。虫損は盤面に著しく生じ、小孔と傷、盤面左端に木地を欠く損傷が複数みられ、虫の死骸を確認した。虫は漆塗膜の剝離や傷などにより生じた隙間から内部へ侵入し、塗膜下で進行していた。本作では虫損が損傷の大きな要因として働いたのだろう。

四辺の縁は短辺と長辺それぞれ一边のみ残り、過半を欠失している。一部は盤面の木地ごと欠失し、残された箇所も漆塗膜が剝がれ木地が露出する。二本の棧脚のうち銘文の上方にある一本は後世補修による白木の補材である。銘文下方の棧脚は端部が欠損しているほか、盤面から打ち込まれた木釘により一部に割れを生じる。

## 七、修復の仕様

漆工品の修復には、汚損を除去するクリーニングや劣化した塗膜の強化、欠損した木地を補うなど様々な手法があげられる。クリーニングや塗膜の強化を全体に施す場合もあるが、本作では劣化が著しく塗膜剝離や木地欠損を進行

させてしまう恐れがあるため後述する修復箇所のみクリーニングを施した。

修復は所蔵者の意向に沿って実施し、図1の下辺左部分の木地を大きく欠失した箇所のみ附属する白木の補材の再接着と接着箇所のクリーニングを施した。同箇所は木目に沿ってさらに損傷が進行する恐れがあった。この補材は鈍翁の好みとみられる後世補修で取り付けられ、古い接着剤の痕跡から修復当初は接着されていたと推定される。現在は強固に接着されており、容易に脱落する状態であった。今回の接着には木地と補材の接着部分が複雑な形状であったため米粒を水練りした続飯を使用した。

#### 【修復工程】

##### ① 損傷状況の確認と事前調査

品質と形状、修復前の損傷状況を調査・記録し、修復方法を検討した。

##### ② クリーニング(図9)

木地と補材の古い接着剤を柔らかい綿棒に精製水を含ませて接着剤を除去した。

##### ③ 欠損部分の補強(図10、図11)

続飯を盤面の欠損箇所の木地と補材の接着面に塗布し、クランプ(図11)を使用して接着した。

##### ④ 報告書の作成

修復後(図12)、写真撮影および修復の作業工程などを記した報告書を作成した。

## 謝辞・付記

この羅漢盤の分析と保存修復は令和三年度、本学文学部文化財学科矢島律子教授研究室の受託研究により実施された。前年度から予備調査研究に関わった小池が本稿の前段（緒言、概要）を担当し、後半の分析と修復について受託研究に参加した渡邊が矢島研究室からの情報提供と協力を得て執筆した。本作の修復をご指導いただいた漆芸文化財修復家の松本達弥氏、本学矢島教授および実際の分析と修復施工にあたった大学院生の高橋奈、松本卓己ら諸氏に感謝したい。挿図の画像写真は、高橋・松本の両院生と渡邊の撮影、模式図は渡邊による。



図9 クリーニング



図10 補材の接着



図11 クランプ圧着



図12 修復後

註

- (1) 諸橋轍次『大漢和辞典』(大修館書店、昭和三十二年)「盤」の項目。
- (2) 五島美術館学芸部『鈍翁の眼…益田鈍翁の美の世界』(五島美術館、五島美術館展覧会図録一二二、一九九八年十月)には、名物茶の湯道具・名画の他に奈良時代以降の仏具・仏典・仏画が収録され、コレクションがその後散逸した経緯が解説されている。
- (3) 太田博太郎「法華寺の歴史」『大和古寺大観』第五巻、秋篠寺・法華寺・海龍王寺・不退寺、一九七八年
- (4) 前掲書所収の画像、翻刻積文を参照した。
- (5) 河田貞、『根来』(美術図書出版紫紅社、昭和六〇年四月二十八日)
- (6) 河田貞監修、MIHOミュージアム編集、『朱漆「根来」中世に咲いた華』(目の眼、二〇一三年)
- (7) 北村仁美「松田権六「優品之調査」」(『東京国立近代美術館 研究紀要』第一七号、二〇一三年、七六〜九四頁)の資料表九十および九十一番を参照した。
- (8) 放射性炭素年代測定は株式会社パレオ・ラボに委託した。測定結果は、伊藤茂ほか「徳治2年銘羅漢盤 放射性炭素年代測定 報告書」(株式会社パレオ・ラボ、令和三年十一月)より抄出した。

(こいけ とみお・鶴見大学仏教文化研究所客員研究員・公益財団法人静嘉堂文庫美術館学芸部長)

(わたなべ ゆか・鶴見大学大学院文学研究科文化財学専攻修了・博士(文化財学))